HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	2010年度開催北方研究教育センターフォーラムおよび講演会
Author(s)	永山, ゆかり
Citation	北方人文研究, 4, 105-108
Issue Date	2011-03-31
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/45287
Type	departmental bulletin paper
File Information	NAGAYAMA.pdf



Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

〈報　告〉

2010 年度開催北方研究教育センターフォーラム および講演会

永　山　ゆかり
北海道大学大学院文学研究科

1．『言語で巡るシベリアの旅 ── 極寒の地に暮らす人々とことば ──』

本フォーラムは 2011 年 2 月 5 日に文学研究科北方研究教育センターと北海道民族学会の共催で開催された。津曲敏郎北方研究教育センター長の開会挨拶に始まり、本センター教員および学外の講演者による次のような発表がおこなわれた。

第 1 部 「古アジア諸語」
　「アリュートル語」 永山ゆかり（北方研究教育センター）
　「イテリメン語」 小野智香子（千葉大学）
　「ユカギール語」 長崎郁（東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所）
第 2 部 「アルタイ諸語」
　「エウェン語」 鍛治広真（東京大学大学院博士課程）
　「シベ語」 児倉徳和（東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所）
　「サハ語」 江畑冬生（日本学術振興会特別研究員）
第 3 部　パネルディスカッション
　「シベリア研究の魅力」
　質問コーナー

会場では「クリッカー」と呼ばれる機器が貸与され、各発表者のスライド資料に組み込まれたクイズに聴衆ひとりひとりが回答するという双方向型のプレゼンテーションが試みられた。

永山による発表は、「シベリア」という語の指す範囲を概説し、シベリア先住民言語の枠組みを示した。またカムチャッカで話されるアリュートル語について、能格性や抱合について日本語との違いを確認しながら紹介した。

小野による発表はアリュートル語同様にカムチャッカで話されるイテリメン語についてのものである。イテリメン語とチュクチ・カムチャッカ語族との関係や、6 子音が連続することもあるという複雑な発音、12 語を区別するアザラシをあらわす語彙の豊富さなどについて紹介した。

長崎による発表は、コリマ川流域で話されるコリマ•ユカギール語について、「妻」や「犬」などの基礎語彙が借用語である、形容詞的な意味は動詞によってあらわされるという日本語とは異なる

特徴を持つ一方で、長母音と短母音の区別がある、動詞が末尾にくるなどという日本語と似た特徴を持つことを紹介した。

鍛治による発表は、まずアルタイ諸語およびツングース諸語について概説し、次にエウェン語の母音調和・語順・人称語尾について解説した。

児倉による発表はシベリアから離れ、ツングース諸語の中でもっとも南で話されるシベ語についての紹介である。シベ族が新疆に移住した経緯や移動経路について概観したあと、ほかのツングース諸語とは異なり動詞の人称接辞がないことや母音調和が衰退していることなどを示した。

江畑による発表はチュルク諸語におけるサハ語の位置づけの解説から始まり、サハ語と日本語の類似点や、ことわざ・早口ことば・なぞなぞ・オロンホと呼ばれる英雄叙事詩などサハ語の豊かな世界を紹介した。



写真1　パネル・ディスカッション



写真2　会場の様子

パネルディスカッションでは発表者全員が登壇し、研究者を魅きつけるシベリアの魅力や、日本人研究者としてシベリア先住民言語を調査することの意義について議論した。

ディスカッション後には会場からの質問を受ける時間が設けられ、専門的な研究テーマにかかわる質問を始めとして、研究の意義や公開方法などについて多くの質問や意見が寄せられた。会場からのご指摘にもあったように、学術研究の成果を本フォーラムのような形で一般市民に公開する機会はそれほど多くはない。今後このような機会をさらに増やしていくことの重要性を改めて確認した。

2.『ロシアの中の少数言語 ── カムチャッカ先住民のパーソナルヒストリー ──』

本講演会は2011年2月18日に文学研究科北方研究教育センターと北海道民族学会の共催で開催された。講演者はカムチャッカ先住民言語のひとつ、アリュートル語の話者であり文化伝承者であるリディア・チェチュリナさんで、大国ロシアの中で先住民がどのように自分たちの言語や文化を受けついできたのか、ご自身の経験を語っていただいた。

1957年生まれのチェチュリナさんは、ロシア語を一言も話せなかった祖母と母、2年だけロシア語の初等教育を受けた父のもとに育ったが、小学校入学を機に、同じ村に両親が健在であるにもか

かわらず寄宿舎に入れられた。小学校の教員も寄宿舎の舎監もロシア人であり、ロシア語のみを使用していた。自宅に帰るのを許されるのは週末だけであった。これはソ連の政策によるもので、先住民の子供だけが寄宿舎に入れられ、ロシア人の子供は両親のもとで暮らしていた。チェチュリナさんは週末や長期休暇の折には祖母とともに過ごし、昔話を聞いたり、トナカイやアザラシの皮のなめし方、縫い方などを習った。

その後 1974 年に、生まれ育ったアナプカ村が閉鎖され、村の住人は近隣の村数ヶ所に移住させられた。移住先は政府の割り当てによって決められ、住民の希望は反映されなかった。強制移住後は高齢者が相次いで亡くなり、3 年のうちにほぼ全員が亡くなったという。移住先の村ではロシア系住民の割合が多く、かつてアナプカ村で盛大に祝っていたアザラシ送りの祭も、縮小せざるを得なくなった。

義務教育修了後はペトロパブロフスク・カムチャツキー市の音楽学校で学び、文化活動を組織するリーダーとしての教育を受けた。地元のイリプイリ村に戻ってからは 60 代から 70 代の先住民の女性を中心とした民族舞踊アンサンブルを創設し、トナカイ遊牧キャンプをヘリで慰問したり、村の中でのさまざまなイベントに出演した。演目はアリュートル語の歌や舞踊、民話をモチーフとした寸劇などである。公演旅行の際には必ず毛皮や角を細工した工芸品を持参し、各地で小さな展覧会を開いた。

その後、娘の小学校入学を機にペトロパブロフスク・カムチャツキー市へ転居、現在に至るまで同市に隣接するエリゾボ市の小学校生向け課外活動クラブで先住民文化について教えている。そのほかにも観光客や地元の小学生を対象に、先住民文化について解説したり、歌や舞踊を実演したりする活動を続けている。チェチュリナさんはさらに、ペトロパブロフスク市周辺に住む先住民文化の伝承者たちが、日常どのように交流し協力しあっているかを紹介した。最後にチェチュリナさんは、1950 年代から 80 年代まで



写真 1　リディア・チェチュリナさん



写真 2　講演会の聴衆

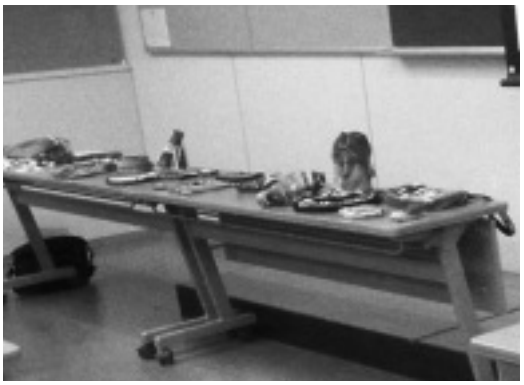


写真 3　チェチュリナさんほか先住民作家による工芸品展示

に撮影されたチェチュリナさん自身の家族や文化活動の写真を紹介して講演を終えた。

講演後には会場からの質問を受ける時間が設けられ、カムチャッカ先住民の文化について理解を深める貴重な機会となった。